

死をどのように考えてきたのか①

おやさと研究所教授
堀内 みどり Midori Horiuchi

自分の命も他人の命も大切にすることになる「死への準備教育」は「死を通して生を考える教育」として考えられています。それは、私たちが他の命によって支えられ「生かされている」という心を養うということです。だからこそ、家庭や社会での大人が子どもとともに生死と向き合うことは、いのちの尊厳を教えていくことにつながっていきます。

私たち人間にとって、死ぬことは当たり前のことです。その当たり前を当たり前として、一人ひとりが受容し、自分の人生をきちんと捉えることができるよう、このことに専心したとっていい人間のいとなみは、いわゆる「宗教」です。それは、生き方を示すということの中に、人間の存在（とその意味）を考え、世界との関連を示し、有限な人間という存在に意味を与えてきました。

終わりと始まり

無限と思われるこの宇宙に存在する私たちは、いったいこの私とはいったい何者なのか、私はどこから来てどこへ行こうとしているのか、なぜ生きるのか、死ねばどこへいくのか、どう生きていくのか、という問いについての答えを求めています。普段意識していない人でも、ひとたび自分自身や親しい人の死に向き合わざるを得なくなったときには、否応無しになぜ、今、死と遭遇するのかをいうことを通して、生死を感じ、生死について考えざるを得ないのではと思います。

2012年8月、スウェーデンの首都ストックホルムにあるSödertörn大学を会場として開かれた学術大会は「ENDS AND BEGINNINGS」をテーマにしていました。この世に存在するあらゆるものは時間に制約された形でこの世に存在するということを念頭におけば、始まりと終わりがあるということになるでしょう。大会テーマの趣旨では、そのように私たちの存在は時間と関わり、そういった中で宗教が“始まり”、人は宗教が提示した、ある特定の思想やその実践を通して避けられない自らの終わり（死）を“避けよう”としてきたということがいわれます。つまり、宗教は、時間から受ける制約や限界から逃れたいという私たちの願いから発生し、たとえば、アブラハムの系統の宗教では、しばしば「新しい始まりへの約束」—この世での繁栄あるいは来世で再び新しくされた豊かな存在（蘇生、復活）—というものを巡った教えが提供されました。それら多くの宗教伝統では、しばしば人類は宇宙的ドラマの中心に位置づけられ、ある絶対的な始まり、ある天啓書的（終末論的）終わりおよびそれを越えた永遠という概念を形成しています。この永遠なるものこそが時間という制約をなくすものとして考えられたのです。宗教的行為は、儀礼化され、季節やコミュニティ、または、個人の人生の段階に応じて、「始まりと終わり」を表現し祝うものとして、実践されてきました。

そして、こうした事柄は、宗教一般にひとつの始まりがあつて終わりがあると言い得るのかという問いとして、宗教を学ぶ人々の注意を惹きつけ続けてきたと述べています。先史時代の暗闇で、または、人間の認識の進化において、私たちは、宗教の始まりを探りだすことができるのだろうか。さらに、世俗化、合理化と覚醒（迷いや幻からの解放）が続いている時代にあつてなお、宗教

の終わりや衰退について話すのはまだ可能なのだろうか。

この、テーマについての趣旨前半で示されるように、私たちは時間という流れの中で生きています（存在しています）。ここで生きるということ、存在するということは、「私」ひとりのこととしては理解できません。私を取り巻くあらゆる要因との関わりで説明されていきます。中でも「時間」は私たちにその生存という時間的限界を与えるものです。ですから、その時間の制約や限定、境界といったものをどのように捉え、どのように説明するかということがまさに宗教の宿命となり、始めになったのかもしれませんが。死は時間的経緯によって当然訪れるものでありますが、その死に対して不安や恐怖を抱けば、それを取り除くことができたのは、まさに宗教的思想や実践でありました。そこで、永遠（神／超越者／浄土など）につながる有限（「私」）、あるいは両者の関係性によって私たちの有限性の理由や意味が提示されてきたとっていいのかもしれませんが。

多くの場合、こうした言説は「死生観」として示されるものですが、単に「死とは何か」というだけではなく、死が説明される「世界観」がそこにはあつて、それによって展開された世界の中で生きる私たちの「生き方」へとつながっていきます。世界はこの世として言い表されるだけでなく、過去や未来という時間的な広がりの中で説明されるのが一般的で、それは、結局のところ「すくい（救い）」へと向かっていくものでしょう。ですから、そのための思想や実践がいわば「儀礼」あるいは「型」「見本」「掟」として継承され、あるいは「祈り」として定着していったということになるのでしょうか。私たちは、有限であるということ、「知った」からこそ、「神」を求めているのかもしれませんが。時間（に制約されているという恐怖）からの解放を宗教の始源として考えれば、以上のような文脈で、宗教というものをとらえることも可能でしょう。

上述のように、終末論的な終焉を描く宗教では、新しい世が想定されます。それは、今私たちが生きている世界とは異なり、異なるレベルの世界として描かれ、そこに「新しくなった」私たちが住むことになります。新しくなるという中身にもよりますが、ときには選ばれた人々の世界としても説かれます。一方、悟りの宗教と呼ばれるような教えもあります。その場合でも悟りに向かって自らの努力が強く求められることばかりではありません。また、得た悟りを自分だけのものとするのがいいとも限りません。

以後、主だった死生観を見ていきたいと思います。ストックホルムでの研究発表に参加した印象では、人は今も、どこにいても、宗教的な空間を作り出し、宗教的行為をしているということでした。移民先であれば、そうした技法を持ち込んで自分が親しんでいる宗教空間を仲間と作り出しますし、科学や医療や技術の進歩によって宗教的实践がなくなってしまうということでもないようです。教団や宗派によって提供されるものを嫌ってはいても、たとえばスピリチュアルへの関心はあることを示す様々な状況は、宗教そのものではなく常に「今」を考えるべき宗教教団や宗教者への「神の苦言という表象」のように感じられました。